

【272】

氏名	小野茂樹
学位の種類	おののしげき 農学博士
学位記番号	論農博第198号
学位授与の日付	昭和43年5月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	和牛の流通に関する研究

論文調査委員 (主査) 教授 上坂章次 教授 西川義正 教授 桑原正信

論文内容の要旨

和牛は現在、役肉用種から肉用種への転換の過渡期にあり、この状態はなお当分の間続くものと思われる。本論文はこの過渡期における和牛の流通を研究したものであって5章からなっている。

第1章は緒論である。

第2章は和牛流通の組織および流通費に関する研究である。和牛の流通は、往時、子牛生産地帯と使役地帯との間で組織立てられていたが、その後肥育牛生産地帯および育成地帯が生ずるにおよび、多元的となり、その間、家畜商の支配がとくに強くなった。明治以降、市場を生産者の組合営に移行した後も、この状態は依然として続けられてきた。その後生産者が自らの立場で市場取引を改善せんとして子牛のせり市場が普及し、ここに小規模ではあるが和牛市場はせり取引市場と相対取引市場とに2分された。また他方、次第に広域化する市場圏に対応する集散地市場も発達した。しかし和牛の経済性が役肉用牛から肉用牛に移行し、和牛生産の内容の多様性に基づくさくそうした流通径路が一応単純化されるとともに、需要地からの直接購買がふえた。他方産地でも市場の整備統合が行なわれ、その卸売市場としての市場機能の合理化が進められつつある。これに呼応して農家の共同取引体制の拡充がみられ、一連の和牛流通組織における近代化が進められ、地元家畜商の勢力は大きく後退した。また他方系統農協ルートによる販売組織の開発などにより、家畜商人資本だけが過大な流通マージンを収奪することも許されなくなりつつある。もっとも家畜商もその取引規模の大きいものは、すでに近代的商業資本として脱皮しつつあり、そのルートの短縮されたものでは、かえって系統農協ルートの、いわゆる段階制による場合よりも流通費の少ない事例も生まれていることなどが論述せられている。なおこの間、著者は最近わが国で行なわれだした去勢牛の若令肥育について市場流通の立場からもその有利性の存することを指摘している。

第3章は和牛価格の形成要因とその変化に関する研究である。従来の和牛価格は農家の所得増、農作業の季節性などに支配されたが、終局的には需要側の飼養戸数または頭数と密接な関係をもっていた。少なくともそれは和牛の最終用途である牛肉価格とは、あまり相関しない価格変動を示した。ところが和牛が

肉用牛化されるに伴って、飼養頭数と子牛価格の動向との相関の逆転、雌の価格に対する雄価格の比率（雄価率）の上昇、品質差に基づく価格開差の減少など、新しい現象が連続とあらわれてきた。これらの原因に対し牛肉の需要増と殺頭数の増加肥育の振興など常識的な考察以外に、著者は、和牛生産構造の零細性、子牛の出荷条件の変化、和牛登録制度の普及、子牛がふつうの農産物と異なり、価格の高い場所から低い場所に流れる特異現象などの立場から独自の考察を試みている。なおその間、近年の子牛価格形成に対しその体重の貢献度があまりに大きく、これが和牛の放牧型多頭飼育経営の展開を著しく阻止している事実を指摘し、そのゆきすぎであることを強調している。

第4章は和牛のせり市に関する研究である。まず、わが国における家畜市場ことに牛市場の発展過程について詳記するとともに、その史的考察を行ない、現存する和牛せり市の問題点の抽出とその解明の資料をえようとしている。元来わが国の和牛の子牛せり市は法的根拠のもとに子牛が強制出荷されていることに、その大きな特色がある。著者もこのこと自体にはある程度の賛意を表しているが、現在の家畜取引法の制定により取引方法をせりに統一していることに対しては大いに批判的である。結論として和牛流通の近代化は、和牛流通全体の組織と機構とに求めるべきであって、せりという取引方法のなかにその合理化条件のすべてが集約されているかのごとく考えるべきではないことを主張している。

第5章は総括である。

### 論文審査の結果の要旨

和牛の流通には問題点が多く、その後進性はあまりにも有名である。しかしこれに関する研究は比較的少なく、その最大の原因は対象となるものが調査研究のしにくいものであることにあると思われる。著者はよくこの困難性を克服し、和牛流通の全面にわたり、多くの資料を集めて、これをよく消化し、綿密な考察を行なって多くの新しい知見をえている。すなわち役肉用種から肉用種へ転換しつつある和牛について、その流通の組織および流通費の実態を明らかにし、その価格の形成要因とその変化を追求している。また和牛子牛のせり市場についても詳細な研究を行ない、その現存する問題点の解明に寄与している。これらの結果は和牛流通機構の近代化を推進する上に大いに役立つものであって畜産学上ならびに産業上貢献するところが大きい。

よって本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。